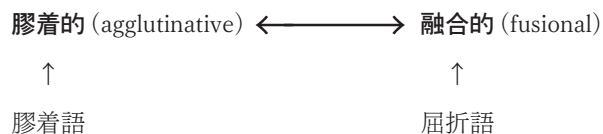


朝鮮語・トルコ語のようにそれぞれの意味を持った形態素がつながっていきようなタイプの言語で、屈折語はラテン語・ドイツ語・ロシア語のようにそれぞれの意味がどの形態素に相当するかがはっきりと形式の上で分けられないものを指す。



### Column③ 抱合語 incorporating language

動詞が独立した名詞を取り込んで全体をひとつの動詞としてしまう抱合と呼ばれる過程を持つ言語がある。抱合は動詞を主要部とする一種の複合であり、日本語でも「傷をつける」と「傷つける」のような例があるが、日本語においては固定したいくつかの動詞にそのような構造が見られるにすぎず、「印つける」「バツつける」「薬つける」「おまけつける」「醤油つける」のような語を作れるわけではない。(これらの例は「を」が省略されたものとしては存在可能だが、その場合は1語となったわけではなく、「バ'ッ、つけ'る」のようにアクセントやポーズの挿入可能性からも2語であることが分かる。)抱合語としてはアメリカ先住民のいくつかの言語がよく知られているが、ここではM. Shibatani (柴谷方良)のThe Languages of Japan (Cambridge University Press, 1990, p.63)からアイヌ語の例をひとつ示そう。

Inaw a-ke (inaw「イナウ」、ke「作る」、a-「他動詞につく接辞」)

**Inaw-ke-an** (inaw「イナウ」、ke「作る」、-an「自動詞につく接辞」)  
「イナウ(アイヌの祭具のひとつ)を作る」という内容の文だが、2番目の文では名詞(ここでは目的語)のinawが動詞に取り込まれて、自動詞化している。目的語が動詞に取り込まれるという抱合によって文法項が減り、他動詞は自動詞化するのである。

## 9 形態変化と語順

ロシア語では「オリガ(Ol'ga)がアナスタシーヤ(Anastasija)をたたいた」というのをOl'ga udarila Anastasijuと言ってもAnastasiju udarila Ol'gaのように語順を変えても、名詞の形態変化があるのでオリガがアナスタシーヤをたたいたという事態を表すことは変わらない。オリガには主格形のOl'gaが、アナスタシーヤには対格形のAnastasijuが使われているからである。しかし、英語ではMargaret hit Jennifer (マーガレットがジェニファーをたたいた)という事態をJennifer hit Margaretという語順で言うことはできない。英語のように形態変化が少ない言語では、それが多くの言語において形態変化が担っている機能の一部を語順が担う。ラテン語は形態変化の多い言語であるが、後のほうの時代になるとその一部が失われ、それとともに語順の自由度が減少した。なお、形態変化の大きな言語では語順の違いを別の目的に使うことができる。(コラム⑩「主題と主題化」を参照のこと。)

我 叫 他 殺 了      彼に殺させた      彼に殺された  
私      彼 殺す [完了]

この例のように結果的影響性の強い動詞（「殺す」など）の場合、主語の名詞句は動作の担い手とも受け手とも取られるが、そうでない動詞（「引っ張る」など）の場合は受身の解釈は成立しない。

我 叫 他 拉 了      彼に引っ張らせた      ×  
私      彼 引っ張る [完了]

しかし、次のように影響の結果を示す表現（ここでは「引っ張る」の意味の「拉」に「倒」を添えたもの）を使えば受身の意味にも解釈できるといふ。

我 叫 他 拉 倒 了      彼に引き倒させた      彼に引き倒された  
私      彼 引き倒す [完了]

#### 4.11 一致 agreement

文において関連する要素どうしが形式上の関係を示すことを一致という。まず、動詞の形に現れるものがある。英語でgoとなるかgoesとなるかはその主語の人称と数によって決まる。英語ではこのような形をほとんど失ってしまったが、ドイツ語の直接法現在形は次のように人称と数によって形が異なる。

表8 ドイツ語 動詞「持つ」直接法現在形

	単数	複数
1人称	habe	haben
2人称	hast	habt
3人称	hat	haben

ロシア語でも同様だが、過去形の場合は人称は関係なく、数と名詞のクラス（性）が関係する<sup>8</sup>。

表9 ロシア語 動詞「行く」過去形

	単数	複数
男性	šol	šli
女性	šla	
中性	šlo	

ハンガリー語などでは、主語だけでなく目的語によって動詞の形が異なる場合がある。

形容詞も修飾する名詞や主語との一致を示す言語がある。

## 5 対格言語と能格言語

日本語では「太郎が走った」という自動詞文でも「太郎が雑誌を読んだ」という他動詞文でもその動作主である「太郎」は同じ格表示「が」を取る。英語でも同様である。英語の場合、名詞は格が形では示されないのので代名詞を例にとっていうと、走った人も読んだ人もどちらも同じHe/She（主格）で示される。ところが、バスク語やカフカスの諸言語などでは

<sup>8</sup> ロシア語の場合、主語の性別も関わる。したがって、同じ「私」でもその人間が男か女かで動詞の過去形の形式が異なる。また、女性形と中性形が発音上区別できない動詞も多い。

事情が異なり、「太郎が走った」の「太郎」と「太郎が雑誌を読んだ」の「雑誌」が同じ格表示を受ける。日本語や英語のようなタイプの言語を対格言語 (accusative language)、バスク語やカフカスの諸言語などのタイプを能格言語 (ergative language) と呼ぶ<sup>9</sup>。格の種類を●○▲△で表して日本語の文でその関係を示すと次のようになる。

表10

対格言語の格表示	能格言語の格表示
(太郎● 走った)	(太郎▲ 走った)
(太郎● 雑誌○ 読んだ)	(太郎△ 雑誌▲ 読んだ)

ここで「●=主格」、「○=対格」、「▲=絶対格」、「△=能格」と呼ばれる。

自動詞の動作主を Subject (S)、他動詞の動作主を Agent (A)、他動詞の動作の対象を Patient (P) とすると、「S + 自動詞」、「A + P + 他動詞」となる。(SとAは自動詞と他動詞の動作主を区別して示すために便宜上分けたものである。) それらと格との関係を表にすると以下のようになる。

表11

対格言語の格表示		能格言語の格表示
主格 nominative	A 他動詞の動作主	能格 ergative
	S 自動詞の動作主	絶対格 absolutive
対格 accusative	P 他動詞の動作の対象	

9 厳密には、主格対格言語 (nominative-accusative language)、絶対格能格言語 (absolutive-ergative language) という。

以下、さらにいくつかの例文で示そう。対格言語のシンタクス (accusative syntax) では、日本語を例にとると、次のようになっている。

(1) 父がもどった (「父」は自動詞の動作主でS)

S

(2) 父が母を見た (「父」は他動詞の動作主でA、「母」は他動詞の動作の対象でP)

A P

(3) 父がもどって母を見た

S/A P

(3) では、「父」は自動詞「もどる」のS、他動詞「見る」のAであるから、SとAを兼ねることになる。

能格言語のシンタクス (ergative syntax) の例としてオーストラリアのジルバル (Dyirbal) 語を見てみよう。

(1') nguma-Ø banaga-nyu. (父[S]がもどった)

S

父-abs. もどった

(2') nguma-Ø yabu-nggu bura-n. (父[P]を母[A]が見た)

P

A

父-abs. 母-erg. 見た

(3') nguma-Ø banaga-nyu yabu-nggu bura-n. (父[S/P]がもどって母[A]に見られた)

S/P

A

父-abs. もどった 母-erg. 見た

nguma (父) は (1') と (2') で同じ格表示を受けているが、能格言語なので (2') の意味は上の日本語の場合と反対で、「父」が動作の対象となっている。(3') では、「父」は自動詞「もどる」のSだが、自動詞のとき

# 語用論

PRAGMATICS

## 参考文献

郡司隆男 他 (1998) 『岩波講座 言語の科学4 意味』岩波書店

池上嘉彦 (1975) 『意味論』大修館書店

リーチ (1977) 『現代意味論』研究社

杉本孝司 (1998) 『形式意味論』くろしお出版

ポルツィヒ 他 (1975) 『現代ドイツ意味理論の源流』大修館書店

サピア、ウォーフ 他 (1970) 『文化人類学と言語学』弘文堂

### 〔語の意味の分析〕

柴田 武 他 (1976) 『ことばの意味 辞書に書いてないこと』平凡社 (平凡社ライブラリー版、2002)

柴田 武 他 (1979) 『ことばの意味2 辞書に書いてないこと』平凡社 (平凡社ライブラリー版、2003)

国広哲弥 他 (1982) 『ことばの意味3 辞書に書いてないこと』平凡社 (平凡社ライブラリー版、2003)

### 〔認知意味論〕

レイコフ 他 (1986) 『レトリックと人生』大修館書店

大堀寿夫 (2002) 『認知言語学』東京大学出版会

杉本孝司 (1998) 『認知意味論』くろしお出版

辻 幸夫 (編) (2001) 『ことばの認知科学事典』大修館書店

辻 幸夫 (編) (2002) 『認知言語学キーワード事典』研究社

ウンゲラー、シュミット (1998) 『認知言語学入門』大修館書店

## 1 語用論とは

話し手は場面、文脈、知識、常識などの情報 (コンテキスト) を考慮に入れながら、なんらかの意図を持って発話する。聞き手はコンテキストを考慮しながら、話し手の発した言葉の意味や意図を解釈しようとする。

意味論がコンテキストから離れて語や文の意味を扱うのに対し (ラング)、語用論では具体的な発話の場面における意味を考察する (パロール)。すなわち、言葉の使われ方を研究する。一例をあげれば、「午後から雨らしいよ」という文は文字通りの意味 (言内の意味) では「午後から雨が降るという情報を得た。私は今それを伝えている」ということである。その言葉が、

A 「今日の天気は?」

B 「午後から雨らしいよ。」

という文脈で使われればその文字通りの意味と同様に解釈されるが、

A 「いってきま〜す。」

B 「午後から雨らしいよ。」

であれば「傘を持っていきなさい」という言外の意味が生じる。状況によっては「洗濯物が外に出てるけど、中に入れて出かけたほうがいいよ」という意味にもなりうる。さらに、

A「今日は買い物に行かなくちゃ。」

B「午後から雨らしいよ。」

であれば、「買い物は午前中に行った方がいい」と解釈される。このような意味はその言葉が発せられた状況や以前から持っている知識によって理解されるので、意味論の扱う範囲を超えたものである。

## 2 発話行為理論 Speech act theory

発話は物事を記述するだけでなく何らかの行為を遂行する機能も持つということをオースティン (J. L. Austin) が指摘した。たとえば、「車が来ます」とか「この海にはサメがいます」というのは、それだけでは町の状景や海の生態の描写・記述のようだが、ある状況においてはその言葉が発することによって「警告」という行為（「危ないから、よける」、「危ないから、ここで泳ぐな」）をおこなっている。同様に、「レポートはあした必ず提出します」というのは、今晚がんばって終わらせてあした出すことに決めているという自分の心の中の状態を記述しているのではなく、相手に対して「約束」という行為を遂行している。「おめでとうございます」というのも、それを言うこと自体によって「祝福」という行為がおこなわれるのである。さらに、「第××回全国空手選手権大会を開催する」、「××君を内閣総理大臣に任命する」といった言葉は、適切な状況で適切な人物がそれを発することによって「開会」、「任命」という行為がおこ

なわれる。

オースティンは、遂行される言語行為を次の3つに分類した。

(a) 発語行為 (locutionary act)

(b) 発語内行為 (illocutionary act)

(c) 発語媒介行為 (perlocutionary act)

たとえば、海岸で泳ごうとしている人に対して「この海にはサメがいます」という発言は、それを音声的・文法的に正しく発すること (= 発語行為) によりその文字通りの意味が伝えられ、それと同時に「警告」という行為 (= 発語内行為) がおこなわれ、聞き手の気持ちや行動に影響を及ぼす (= 発語媒介行為) というのである。このように、警告・約束・祝福・命令・要求・その他の行為を示す発語内行為をおこなうために用いられる文を行為遂行的 (performative)、状況を描写・記述する文を事実確認的 (constative) と呼んで区別した。事実確認的な文は内容が真か偽かという基準によって判断できるのに対して、行為遂行的な文 (遂行文と呼ぶ) は適切か不適切か (felicitous/unfelicitous) によって判断される。(しかし、結果的にはどの文にも行為遂行的な機能が備わっていると、この区別は大きな意味を持たない。)

このオースティンの理論は、後にサール (J. R. Searle) によりさらに発展させられた。

## 3 会話の含意 Conversational implicature

発せられた言葉を聞いたとき、人間はなぜそこで表現されていないことも理解するのか、すなわち、言外の意味がいかんして生じるのか、

スペイン語では  $v > b$  という変化が起こり、 $v$  がなくなった。(綴りの上では  $v$  を保っていても発音は  $[b]$  である。)

## 2.4.2 分裂 split

ラテン語の  $[k]$  は、イタリア語で後舌母音の前では  $[k]$  のままであったが、前舌母音の前では  $[tʃ]$  となった。中英語の  $/u/$  は  $/ə/$  と  $/u/$  に分裂し、 $run$   $[rɛn]$  と  $put$   $[pʊt]$  のような違いができた。モンゴル系のブリヤド(ブリヤート)語では  $s$  が音節頭で  $h$  に、音節末で  $d$  に変わり、 $sara > hara$  (月)、 $ulus > ulad$  (国) のように変化した。

## 3 形態変化 morphological change

### 3.1 類推 analogy

共通語において「見る・食べる」などの1段動詞(母音語幹動詞)と不規則動詞「来る」は、受身形も可能形も「見られる・食べられる」、「来られる」で、同じ形である。それに対して、「取る・切る」などの5段動詞(子音語幹動詞)は、受身形は「取られる・切られる」、可能形は「取れる・切れる」と区別される。それらからの類推で1段動詞の一部と不規則動詞「来る」に「見れる・食べれる」、「来れる」といった新たな可能形が生まれてきている。本来  $mi-$ 、 $tabe-$  に  $rare-ru$  の付いた  $mi-rare-ru$ 、 $tabe-$

$rare-ru$  が<sup>3</sup>、 $tor-are-ru$ 、 $kir-are-ru$  (受身) と  $tor-e-ru$ 、 $kir-e-ru$  (可能) からの類推で  $mir-are-ru$ 、 $taber-are-ru$  のように解釈されて、そこから  $mir-e-ru$ 、 $taber-e-ru$  が作られたのである。

また、「見せて(くれ)！」というところを「見して!」と言うことがよくあるが、それも類推と考えられる。たとえば、5段動詞の使役形には「やらせる・書かせる」のほかに、使用は限られるが「やらす・書かす」のような形も持つものがある。それらのテ形はそれぞれ「やらせて・書かせて」と「やらして・書かして」である。「見せる」のテ形は「見せて」であるので、「やらせて・やらして」、「書かせて・書かして」などからの類推によって「見せて」から「見して」が作られたと考えられる。

現代英語の  $help$  (助ける) に当たる語は古英語で  $helpan$ 、 $healp$ 、 $holpen$  という形を持っていたが、規則変化の動詞からの類推でそれが現代英語では  $help$ 、 $helped$ 、 $helped$  となった。

ラテン語で「労働」を意味する語は  $s$  が母音間で  $r$  に変わった。その結果、次の表に示すように  $labōsem > labōrem$ 、 $labōsis > labōris$  という形ができ(段階2)、最終的に母音間でない  $s$  も  $r$  になって  $labos > labor$  という形ができた(段階3)。

	段階1	→	段階2	→	段階3
単数主格(〜が)	labos		labos		labor
単数対格(〜を)	labōsem		labōrem		labōrem
単数属格(〜の)	labōsis		labōris		labōris

### 3.2 異分析 metanalysis

語が本来の切れ目とは異なったところで切られ、その結果新しい語形が生まれることを異分析という。英語の  $nickname$  (ニックネーム) はもともとは  $ekename$  であったが<sup>3</sup>、 $an\ ekename$  が  $a\ nekename$  (a

表1

	5段動詞	1段動詞	
		本来の形	新しく生れた形
受身形	tor-are-ru	mi-rare-ru	→ mir-are-ru
可能形	tor-e-ru	mi-rare-ru	mir-e-ru